

開催報告

2024年度 JAくらしの活動 (生活文化活動) 担当者パワーアップ研修会

今年度は家の光協会とJA全中の共催で、JA生活文化活動担当者を対象に「JAくらしの活動(生活文化活動)担当者パワーアップ研修会」を東西2会場で開催。東日本地区は7月2日～3日に宮城県で、西日本地区は6月11日～12日に福岡県で行いました。東西2会場合計で18JA中央会・45JAの参加をいただき、盛会裏に終了いたしました。研修会プログラムの中から、課題提起、基調報告、2JAからの実践報告、パネルディスカッションの内容、活用講習、JA共済連からの報告、研修のまとめについてご報告します。



主催／一般社団法人 家の光協会
一般社団法人 全国農業協同組合中央会
後援／全国共済農業協同組合連合会

課題
提起

担当者の提案からはじまる

J Aくらしの活動(生活文化活動)の活性化

箕浦隆浩 家の光専門講師

教育文化活動の取り組みを通じて、組合員がJ Aの事業・活動について認知、利用、参加、参画するよう導き、「アクティブメンバーシップ」の確立を目指していきましょう。これには、参加者の「共感」を育み、「感動」ができる企画を考えることが重要です。今回の研修では、企画書の書き方ではなく、どのような方法で企画をつくっていくのかという“視点”を持ち帰ってもらいたいと考えています。

現在、J Aの課題として「農業・農村の危機」「組織・事業・経営の危機」「協同組合の危機」の3つの危機が挙げられ、生活文化活動から組合員との関係強化を図っていくことが重要になっています。女性組織、次世代組織、准組合員、地域住民それぞれに課題があります。それに対する対策を一緒に考えていきましょう。未来のJ Aの姿を考え、それに向けて動いていくきっかけになればと思っています。



基調報告①

第30回J A全国大会議案 組織協議案(案)について 組合員・地域とともに食と農を支える 協同の力 ～協同活動と総合事業の好循環～

東日本地区：鈴木将憲
J A全中 大会議案策定プロジェクト調査役

西日本地区：熊田 妙 J A全中くらし・高齢者対策課課長



第30回J A全国大会議案のスローガンは「組合員・地域とともに食と農を支える協同の力～協同活動と総合事業の好循環～」です。事業と活動を分けて考えるのではなく、両方で組合員の暮らしや地域を支えて、事業と活動の好循環を生み出すことによって、さらに組合員の生活も良くなっていくという考え方です。

前回大会から「10年後の目指す姿」について基本的な部分は変わりませんが、例えば「豊かで暮らしやすい地域共生社会の実現」の内容に関して、「様々な活動を通じて」という文言を追加しています。この“様々な活動”を担っているのが生活文化活動担当者であるみなさんです。本研修を通じて大会議案を理解いただき、「JAのなかでくらしの活動とはどのような位置づけなのか」「なぜ自分がこの仕事をやっているのか」を改めて考えるきっかけにしてほしいと思います。

基調報告②

教育文化活動促進と 家の光普及活用運動について

熊田陽介 家の光協会 普及文化本部 本部長

平成の大合併から令和の大合併に移行している今日、教育文化活動をすすめるにあたっての課題は、支店の広域化や、女性組織・青年組織メンバーの減少など数多く挙げられます。特に、職員が少なくなっているなかでどう組合員に接していくか、いかに組合員を増やしていくかが大きな課題です。

家の光協会では、どのようにJAファンづくりを進めていくか議論するため、令和5年10月に「JAファンづくり検討委員会」を設置しました。議論のなかで、様々な世代に共通して「食と農」「防災」に関心があることがわかりました。これらを切り口に『家の光』は今後もあらゆる方々にJAファンになってもらう、農産物のファンになってもらうよう発信していきます。



実践報告① 福島県 JA福島さくら

女性部活動は「くらしの活動」 の出発点！

～さあ、皆で楽しくLet's
地域貢献活動！～

熊田るり ふれあい福祉課 課長補佐

JA福島さくらは、郡山、たむら、いわき、ふたばの4地区で構成されています。4地区の女性部の意識統一を図るため、2016



年に各地区の代表が集まり、J A福島さくら女性部協議会を設立しました。地域性の異なる4地区の女性部が合同で無理なく取り組める活動を提案し、試行錯誤を重ねながら取り組んでいます。

女性部増員を目的に、「女性部仲間づくりポップコンテスト」を開催しました。女性部活動を写真やイラストで見える化し、支店の入り口などに掲示しています。J A女性組織は組合員や農家でなくても参加できる組織であるということをアピールし、2023年度は67名の方に新規加入をいただきました。

その他にも地域農業を守り食育を促進するため、「J A健康寿命100歳弁当コンテスト」や「応援！おいしい福島レシピコンテスト」を行い、J Aの地域貢献活動に力をいれています。

今後も、行政と連携し食農教育や福祉活動の支援協力を行い、社会とのつながりを強くもっていきたいです。J A職員としてJ A女性部員を支え、一人でも部員を増やしていきたいと思っております。

実践報告② 鹿児島県 J A南さつま

J Aのファンづくり くらしの活動

西尾あかね くらし広報課 課長

フレミズサークル「f f t a c (ファシー)」ではメンバー同士でやりたいことを出し合い、年間のカリキュラムを決めています。インドカレー作りやパンやお菓子作り講座は資格を持っているメンバー自ら、講師を務めました。昨年秋にはミステリーツアーという日帰り旅行を企画し、多くの参加者の関心を集めました。企画から準備、運営までフレミズのメンバーにお願いすることで、より楽しんでもらっているように感じます。女性大学「いきいきサークル」では、昨年度45名の新規登録がありました。参加者には女性部加入を必須としており、さらに会費や材料費で組合員内外の差別化を図り、組合員加入につなげています。

女性部の活動は広報が重要です。フレミズ世代が女性部に加入しないという悩みも広報不足が原因だと思います。楽しみが増えると友達にも声を掛けたくなくなり、口コミを通じて女性部の加入、活動の活性化につながっています。J Aのファンづくりのきっかけはくらしの活動にあると思います。そしてくらしの活動を職員はじめ組合員、地域の方々に知ってもらうこと、その役目を担うのは私たちの仕事です。



J A 暮らしの活動(生活文化活動)のすすめ ～J A 女性組織の活性化とともに～

佐久間幸子 家の光専門講師

今回「J A 暮らしの活動」と「生活文化活動」の研修会を合同開催にしたのは、取り組み内容や目指すもの、担当者、対象者、活動拠点など多くの共通点があるからです。いままで「暮らしの活動」はJ A 全中、「生活文化活動」は家の光協会が先導してきた活動という印象があるかもしれませんが、J A 一体で取り組んでいくものと整理しました。

「J A 暮らしの活動」と「生活文化活動」は活動したからといってすぐに利益が上がるものではありません。わがJ A 意識が高まれば、組合員はおのずとJ A 事業を利用し、参加・参画のレベルが上がり、組織基盤も経営基盤も安定していきます。長期的な視点で見ていく必要があります。

J A 暮らしの活動、生活文化活動、女性組織活動はJ A の生命線です。事業以外の「活動」でつながることに価値があります。今後も活動と事業の好循環を図る工夫をしていきましょう。



共済事業と連携した ライフプランセミナーについて

鈴木敏之 J A 共済連 全国本部
普及企画部 普及企画グループ 課長

ライフプランとはこれからの人生において、いつ、どのようなライフイベントがあるのか、どのようなことをしたいのかを考え、必要な費用を予測することです。ライフプランを考えることで、暮らし・資金計画の課題が見え、今やるべきことが明確になります。また、漠然とした不安を具体的に認識することで、精神的なゆとりが生まれます。

ライフプランを考えるときには同時にお金について考えることが重要です。ぜ



ひ、生活文化事業の一環としてライフプランセミナーを開催し、地域の皆さんと一緒にライフプランと必要なお金について考えてみましょう。

パネルディスカッション

● コーディネーター

箕浦 隆浩 家の光専門講師

● パネリスト

熊田るり 福島県 J A 福島さくら ふれあい福祉課 課長補佐

西尾あかね 鹿児島県 J A 南さつま 暮らし広報課 課長

佐久間幸子 家の光専門講師

加藤 純 J A 全中 J A 改革・組織基盤対策部 部長

熊田陽介 家の光協会 普及文化本部 本部長



参加者から寄せられた質問を基にパネルディスカッションが行われました。特に、活動のマンネリ化や女性部員の減少に関して多くの関心が寄せられました。

J A 南さつまの西尾課長はマンネリ化の課題に対し、「新しい講座や新しい講師を取り入れることを意識しています。職員もアンテナを張る必要があると考え、休日は外部に出向き、つながりを広げています」と話しました。

J A 福島さくらの熊田課長補佐は部員減少に対し、「一人だけではなく、グループごとに減っていく現状があります。新規グループ発足のためにも新しい活動を考えていくことが大切です」と話しました。

佐久間先生は「みそづくりなどの恒例の活動と新しい活動の2つが必要だと考えます。事務局だけで活動を考えると閉鎖的になってしまうので、メンバーのニー

ズを把握し、やりたいことを実現できる組織だと思ってもらうことが大事です。新しい人に入ってもらうために、親子で参加できる食農イベントが有効です。今後は、地域住民へのPR方法も重要になってきます」と話しました。

ま と め

箕浦 隆浩 家の光専門講師

今回の研修会の一番の狙いは、参加者自身が「やってみたい!」と思い、上司からも「その企画良いね!」といわれる企画力を身に付けることです。協同活動の主役は参加者です。しっかりニーズを把握し、それを反映した企画にする必要があります。だからこそ対話が必要です。

組合員にとって支店とは地域、組織、事業運営の拠り所です。JAの活動は支店を中心に行われ、本店はそれをサポートする役割を持っています。どういったサポートが必要なのかは現場の職員との対話を通じて見つけていきましょう。

